

第39回 松浦党連合会が行われました

平成29年6月3日。第39回松浦党研究連合会の総会・研究大会が行われました。市民活動団体である松浦党研究連合会が主催するこの大会は、唐津・伊万里・松浦・平戸・佐世保などで毎年行われており、今年は佐世保の市民文化ホールが会場となりました。

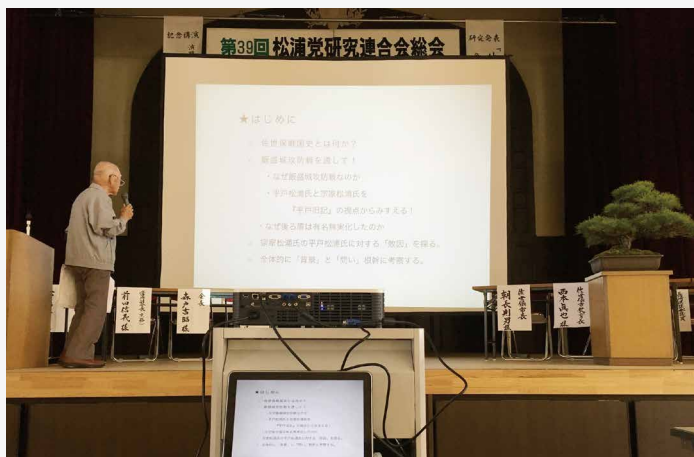
午前中、「佐世保戦国史」考と題して佐世保史談会の平川定美先生が研究発表を行い。午後の部には「滑石製石鍋にみる中世の人と物の交流」と題して社会教育課の松尾秀昭さんが講演を行ないました。お二人共に充実した内容で、会場におこしの皆さんも大変興味深そうに聞いておられました。私はお二人ともに面識のある方で、何かあるたびにご教授頂いている方です。特に平川先生は、実は記念すべき第1回目の連合会の発表者でもあり、40年目にして再びということでした。御年87才になられた先生は、より一層にお元気で佐世保の戦国史を大まかに分かりやすく、熱く語られていました。特に最後に語られた郷土史研究に対する心構えには深く感銘を受けました。

今回、光栄にも平川先生から私に当日使用するスライドショー制作の依頼があり、お手伝いさせていただきました。

👉 次のページより、当日使われたスライドの画面を紹介しますので、内容に興味のある方はご覧ください。



会場となった市民文化ホール



平川先生と事前打ち合わせ中



当日の会場内

松浦党研究連合会 第39回総会と研究大会

日時 平成29年6月3日(土) 午前10時～午後2時40分

総会	10.00～10.40	昼食	12.00～13.00
研究発表	10.50～12.00	講演	13.00～14.30

場所 佐世保市民文化ホール (旧海軍凱旋記念館)
長崎県佐世保市平瀬町2
TEL 0956 (25) 8192 駐車場あり

★記念講演

佐世保市教育委員会社会教育課
主任主事
松尾 秀昭 先生

「滑石製石鍋にみる
中世の人と物の交流」

★研究発表

元佐世保史談会会長
「佐世保戦国史の研究」著者
平川 定美 先生

「佐世保戦国史」考
特に飯盛城攻防戦をめぐって

主催 松浦党研究連合会
後援 佐世保市・佐世保市教育委員会
佐世保史談会
主管 佐世保松浦党研究会

お問い合わせ／松浦党研究連合会事務局 (伊万里市生涯学習センター内)
伊万里市松島町73-1 ☎0955 (22) 1269

一般参加者大歓迎!!
入場無料

「佐世保戦国史」

—特に飯盛城攻防戦をめぐって—

佐世保松浦党研究会会員

平川定実

★はじめに

- 佐世保戦国史とは何か？
- 飯盛城攻防戦を通して！
 - ・ なぜ飯盛城攻防戦なのか
 - ・ 平戸松浦氏と宗家松浦氏を
『平戸旧記』の視点からみすえる！
 - ・ なぜ後ろ盾は有名無実化したのか
- 宗家松浦氏の平戸松浦氏に対する「敗因」を探る。
- 全体的に「背景」と「問い」根幹に考察する。

1 . 佐世保戦国史の類型

佐世保戦国史の舞台

- 本稿の中心舞台
- 佐世保戦国史に関わった城・戦場・神社



(1) 宗家松浦氏と平戸松浦氏との戦い・・・

箕坪城の戦い [延徳3年(1491)]

大智庵城主 松浦丹後守定は、
連合軍（有馬・大村・志佐・佐々氏等）の
一員として箕坪城を攻撃。



箕坪城跡（平戸市主師町）

大智庵城の戦い [明応7年(1498)]

松浦弘定は、箕坪城の戦いの報復として
大智庵城を夜襲・落城させる。



大智庵城跡（瀬戸越）

飯盛城の戦い

第一次

[天文11年(1542)～天文12年(1543)]



飯盛城跡（相浦町）

(2) 宗家松浦氏と平戸松浦氏との連合による戦い

相当原の戦い [元亀2年(1571)]

唐船城(有田盛)対飯盛城(九郎親)との戦いに、
平戸松浦氏(松浦鎮信)助力、
唐船城側、柚木の相当原で敗退。



相当原古戦場 (上柚木町)

(3) 平戸松浦氏による領内体制固め

指方城攻撃 [元亀3年(1572)]

指方城主、針尾三郎左衛門、大村純忠になびく。
松浦隆信、嫡子鎮信・三男九郎親を討手に差し向け、
針尾三郎左衛門を討取る。



指方城跡 (指方町)

遠藤但馬守誅殺事件 [元亀3年(1572)]

佐世保の土豪(赤崎・指方・佐々・中倉・山本等々)
が松浦隆信の命により、遠藤但馬守誅殺、
及び一家惨殺を分担、挙行。



遠藤但馬守供養塔 (吉岡町)

九郎親と東氏との刺し違い事件 [天正2年(1574)]

山口三郎左衛門、東氏をねたみ、九郎親(飯盛城主)に
言い寄り、それを真に受けた九郎親は激高し、
東氏を呼びつけ、両者刺し違いとなった。
このもとをつくった山口三郎左衛門、伊万里にて討取られる。

(4) 平戸松浦氏と大村氏との戦い

遠藤千右衛門、大村氏に反逆 [天正2年(1574)]

遠藤千右衛門、松浦隆信の家臣となり、
井手平城に籠って大村氏に反逆。
大村純忠、家臣を遣わして攻撃、千右衛門討死。

井手平城の戦い [天正14年(1586)]

大村氏、領内一揆鎮圧の名目で、
一族(有馬・波多・有田)に呼びかけ、
井手平・広田両城を攻撃、平戸松浦氏、
領内出城奪回の為反撃、退散させる。



井出平城跡 (新替町)

(5) 平戸松浦氏と後藤氏連携による大村氏との戦い

葛の峠の戦い [永禄12年(1569)]

大村純種(宮領主)大村純忠に反逆し、**後藤氏**に属す。
純忠、士卒をひきいて攻撃するも、
後藤・平戸の連合軍に敗れる。



葛の峠古戦場(宮地町)

(6) 後藤氏と大村氏との戦い [永禄6年(1563)]

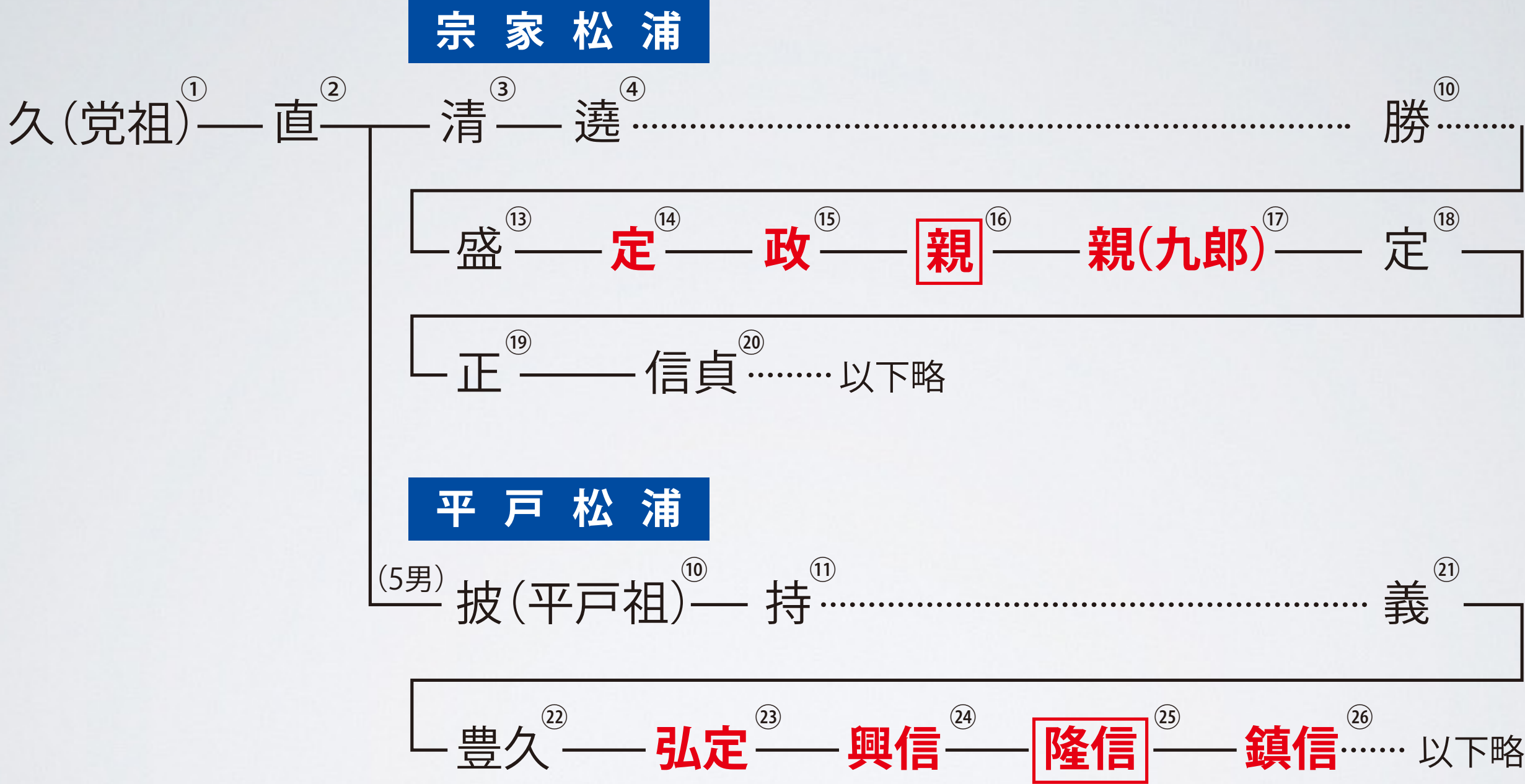
後藤氏(**貴明**) 針尾氏(**伊賀守**)を手なづけ、
横瀬浦焼打ち、**朝永新助(ドン・ルイス)**暗殺、
大村館襲撃を挙行、宿敵大村氏をいかになく
痛みつけた。



横瀬浦(西海市西海町)

2 . 飯盛城の戦い（攻防戦）をめぐって

宗家松浦と平戸松浦



「宗家松浦」——→ 松浦家世伝卷之三十九. 公族伝第十一目録
御厨公 公族伝 松浦「宗家松浦」上佐世保.より

なぜ飯盛城の戦いをとりあげるのか

- (1) 佐世保戦国史→**宗家松浦氏と平戸松浦氏**との抗争史→その典型的な戦い
- (2) 代理戦争の様相を如実に具現した戦い
 - **小弐・有馬・波多・龍造寺氏**等を後楯
 - それら後楯の浮沈に大いに左右される所謂代理戦争の様相を呈する典型的な戦い
- (3) **平戸旧記**にみる宗家松浦氏→具現した戦い
- (4) 平戸松浦氏 (**隆信・鎮信**) が戦国大名として成長する象徴的な戦い

飯盛城の戦いへの多様な問い

- 第1次 ➡ 天文11年（1542）～天文12年（1543）
- 第2次 ➡ 永禄6年（1563）～永禄8年（1565）

(1) 相神浦二年の役とは → 第一次飯盛城の戦いを指すものではないか？

- ◇ 現在では第二次戦争（永禄期）を以て、相神浦二年の役としている。
- ◇ その因 → 『佐世保発達史』北島似水著にある。

予は此の機会に於て前段略述せる、所謂「相神浦二年の役」を縷述すべし。

前段略述 → 第一次
縷述内容 → 第二次] → 第二次 → 『平戸藩史考』に踏襲される。

『平戸旧記』（壺陽録・深江記・三光譜録等）には「三年の籠城」「三年の合戦」「三年の御陣」と第二次をうたいながら、なぜ「相神浦二年の役」なのか？

飯盛城の戦いへの多様な問い

(2) 鉄砲伝来異聞

- ◇ 「鉄砲使用の記事」→ (第一次) 『佐世保発達史』『平戸藩史考』『松浦隆信公略伝』等に記され、それを受けて、数多くの記述がある。
- ◇ 「王直」→ 来航(福江・平戸)は史実にかなったもの。
武器商人である。
屋敷提供の条件として、鉄砲を求めた可能性がある。
種子島の出現は「平戸ー五島」を根拠とする行動の一環であった。
- ◇ この戦いにおける鉄砲使用は、試打ちの態様であったのではないか。
- ◇ 平戸松浦氏の鉄砲使用の先進性(永禄3年の鉄砲隊の派遣)
 - ※ 『大曲記』の鉄砲に関する記事が「王直」来航直後のものであるならば、『鉄砲記』に匹敵する。

飯盛城の戦いへの多様な問い

(3) 『平戸旧記』にみる宗家松浦氏 ～特に「有馬 盛」の処遇をめぐる～

(ア) 「有馬盛」の親の名代としての有馬派遣は飯盛城の戦いが始まる以前である。

[有馬派遣 → 丹坂の戦い (永禄6年3月～7月) への参戦]

飯盛城の戦い → 永禄6年 (1563) 8月14日

『印山記』の「左高と云いしは、...略。去る永禄中相神浦籠城のとき有馬へ呼びおき」の記事、つまり「戦の最中に有馬に行った」と記している。

◇ これはれっきとした誤りであり、脚色ではないのか？

(イ) 有馬盛は戦い (丹坂の戦い) が終わっても、飯盛城へ戻っていないのではないか？

※ はたして戻れただろうか？ (戻った可能性は極めて低い)

『印山記』の「平戸和睦の刻、丹後の守へ反しける」→脚色の色合が濃い。

◇ 丹坂の戦い → 惨敗 → 家臣の離反・義貞国外へ、平戸・後藤氏の提携

飯盛城の戦いへの多様な問い

(4) 後楯は如何にして形成され、そして喪失したのか？

◇ 少弐氏 → 「鎮」

- ・ 少弐資元の子
- ・ 宗金親（飯盛城主）の養子として築城の頃入部
- ・ 資元の供養塔を建立（天文17年） 13回忌
- ・ 鎮の女（芳岩照英）生まれる（天文9年）没（弘治2年）
- ・ 少弐冬尚、竜造寺隆信に敗れ討死 → 事実上の少弐氏滅亡（永禄2年）
- ・ 鎮 → 菰田(佐世保市菰田町)に幽閉される

◇ 有馬氏 → 「盛」

- ・ 宗金親（飯盛城主）の養子として永禄3年（1560）入部
- ・ 丹坂の戦いおこり（永禄6年）親の名代として有馬へ派遣される。
- ・ 丹坂の戦いで惨敗し、家臣の離反、内紛相次ぐ
- ・ 飯盛城へ戻らず、唐船城主となる。

◇ 後藤氏

- ・ 後藤氏、平戸松浦氏と提携（佐世保-日宇-早岐-指方）四村を平戸松浦へ



小弐資元供養塔



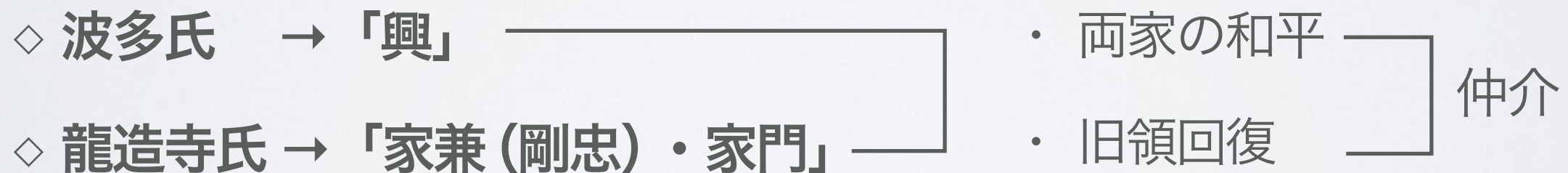
小弐鎮の墓

飯盛城の戦いへの多様な問い

◇ 後藤氏との軍事同盟

- ・ 惟明（隆信の次男）を後藤貴明の養子として武雄へ
- ・ 貴明の女を九郎（隆信の三男）の室として平戸へ
- ・ 貴明の有する四ヶ村（佐世保・臼宇・早岐・指方）を平戸松浦氏（隆信）へ譲渡する。

※ 『家世伝』（道可伝中）「相神浦をして有馬に通ずることを得ざらしめ、其の自らを降るを待たんとするものなり」と言わしめている。



※ 有馬氏の宗家松浦氏に対する後楯としての存在を喪失（有名無実化）せしめたのは？

- ・ 丹坂の戦いに対する惨敗と云う有馬氏自身に起因するが！
- ・ 平戸松浦氏の巧妙な戦略・戦術がより大きかったのではなからうか！

3 . 丹坂の戦い（永禄6年・1563年）前後の動静

(1) 松浦隆信の有馬氏訪問

- ・ 宗金親が盛の養子問題で有馬を訪れる(永禄2年)
- ・ 前年の永禄元年、松浦隆信は有馬氏を訪ねている。
- ・ その際、大村氏(純忠)・西郷氏(純堯)とも会い、大いに歓待されている。



(2) 丹坂の戦いにおける松浦

- ・ 丹坂の戦い（永禄6年）
隆信、兵 500、鉄砲100丁を
もたせ、有馬氏（義貞）の
本陣訪問
- ・ その際、後藤氏（貴明）・
西郷氏（純堯）とも会談
- ・ 本陣火災に会い、隆信 平戸
へ帰陣



(3) 戦後処理における松浦隆信

- 伊万津における西郷・嶋原・大嶋氏への救援

平松氏→救援を求めて平戸へ急行
隆信、兵船50艘をもって伊万津へ
西郷・大島・嶋原の兵1500平戸へ

- 平戸の宿における会談

瑞雲時 → 嶋原氏一行
高野(紺屋-勝音院とも) 西郷純堯・
松浦隆信・鎮信

※西郷氏・嶋原氏は有馬氏の老臣なる故、有馬氏との
談合同然ではないか

※『大曲記』に「純尚(純堯)と隆信との御談合は人しらず候」とあり、

澤正明氏は「有馬氏は宗家松浦氏を援助しないことでも
談合したであろう」と推察[松浦研究 第26号 p92参照]

- 隆信、兵船50艘にて、西郷氏・嶋原氏を諫早の津水まで送りとどける。



4. 宗家松浦氏が平戸松浦氏の 軍門に降った敗因はなにか？

(1) 宗家松浦氏(宗金 親)には、後継者たる男子がいなかった。

- ◇ 後楯の意味合いを含めた養子を迎えねばならない宿命
 - ※平戸松浦氏(隆信)には男子4人、女子3人 → 勢力扶植に貢献

(2) 後楯に依存する一方で、独自の戦略を持ちえず、その浮沈をともにした。

- ◇ 少弐氏滅亡・有馬氏も勢力が減退し、影響力がなくなる。
 - ※平戸松浦氏は一応大内氏滅亡後も、独自の戦略をもって戦国大名として成長

(3) 大航海時代の荒波に処することが皆無に等しく、国の動静、世界の動静から取り残された。

- ◇ 大航海時代の荒波に処する、華々しい平戸港
『大曲記』「唐・南蛮の珍物は年々満々と参候間、京・堺の商人、諸国皆あつまり・・・西のみやことそ人は申しける」
 - ※唐・南蛮の珍物に当然ながら、武器・硝石・火薬等の流入もあり、戦略・戦術において格段の差をつけられ、敗北たらしめたであろう。

(4) 独自の自尊心が、巧妙な戦略を駆使することを妨げたのではないか。

- ◇ 「宗家松浦氏が、平戸松浦に負けるはずがない」
妙な自尊心 → 生々しい戦国期の危機感の喪失
第一次の大勝感 → そのままひきずってきた。

(5) 平戸松浦氏(隆信)の巧妙な戦略・戦術は宗家松浦氏を翻弄し、有馬氏を後楯とする機能を有名無実化したのではあるまいか？

終りにあたって

◇ 郷土史（誌）をみんなの手で、みんなのものに

多くの問い 文体→→ ではなかろうか、ではあるまいか

断定をさける方向←

私見→→ 問いの提供←

◇ 歴史の事実・真実に迫る為に

飯盛城の戦いを通して

◇ 平戸松浦氏からみる宗家松浦氏

- ・ 『平戸旧記』に迫る（メスを入れる）→→→→→ 誤り・脚色の部分指摘
- ・ 従来の史観に対する疑問 →→→→→→→→→→→ 例：相神浦二年の役
- ・ 両者（平戸松浦氏・宗家松浦氏）に迫り、苦笑する場面の指摘

◇ より広い視野から

- ・ 他の郷土誌史
 - ・ 当時の宣教師の記述
 - ・ 当時の記録・日記
- 東アジア・世界の動静から

御清聴有難う御座いました
厚くお礼申し上げます。